J. Fac. Edu. Saga Univ.
Vol. 1, No. 1（2016）65～76

小学校外国語活動におけるプロジェクト型授業の試み

―語彙知識と外国語学習意欲に与える効果について―

林　　裕子[1]，倉冨　裕太[2]，田中　彰一[3]

Implementing project-based learning in classes of Foreign Language Activities: Insights into vocabulary development and motivation towards formal foreign language learning

Yuko HAYASHI, Yuta KURADOMI, Shoichi TANAKA

要　　旨

本研究では、小学校外国語活動におけるプロジェクト型学習が児童の語彙知識（単語の意味理解）と文字を扱う授業への意欲に与える効果を検証する。小学校英語の教科化を見据え、外国語活動における音声面中心の言語活動から「読む」・「書く」ことへの興味を育て、四技能の統合的育成へと連結させていくための指導法の１つとしてプロジェクト型外国語活動を実践した。小学校第６学年の児童77名（２クラス）を対象に「英語絵本の内容に基づくオリジナルの劇を作る」というプロジェクト（課題）を設定し、読み聞かせを取り入れた外国語活動の授業が、児童の語彙知識（単語の意味理解）と外国語学習に対する意欲に与える効果を検証した。語彙テストの結果から、プロジェクト型学習を通して正確に文字認識できる単語の数は増加したが、音素―書記素の対応が不透明な単語（例 ‘Wednesday’）は、正答率が低下していたことが示された。外国語学習への意欲は全体的に伸びていたが、その差は有意水準には達しなかった。小学校外国語活動（領域）と小学校英語（教科）の円滑な接続の観点から、初期リテラシーの獲得を支援するプロジェクト型外国語活動の有効性について考察する。

１．はじめに

小学校英語の教科化に伴い、今日、小学校外国語活動と中学校英語科の接続のみならず、小学校に併設される「領域」と「教科」学習の接続も含めた、多面的・多角的な小中連携カリキュラムの開発・検討が行われている。外国語活動では、‘What would you like?’, ‘Let’s go to...’ などの基本的な表現を含むインプットを「かたまり（chunks）」として認識し模倣する項目学習が中心となる。その中で、「聞く」「話

１：佐賀大学　教育学部　学校教育講座
２：佐賀大学　教育学研究科（大学院生）
３：佐賀大学　教育学部　学校教育講座

す」の技能面に加え、外国語学習の意欲や相手意識、積極性などの情意・態度面の育成も重視しながら、コミュニケーション能力の素地を養っていく。2018年の指導要領改訂の際に新設される小学校英語（教科）では、外国語活動同様に音声を中心とした体験的活動を進めながら、「読むこと」「書くこと」への興味を育成することが目指される（文部科学省，2014）。つまり、英語表現の「意味（meaning）」「（文字・音声）形式（form）」「用法（use）」が三位一体となった言語認識の発達を促し、文構造を体系的に整理・理解するシステム学習への移行が図られる。そのようなシステム学習への円滑な橋渡しに効果的な活動の一つに読み聞かせ（storytelling）が挙げられる。

読み聞かせは、読書に音声補助が加わり、「理解可能性、関連性（興味・関心）、真正性、音声と文字のバランス」に富む質の高いインプットが提供される初期リテラシー活動である（村野井，2006）。普段の授業で音声面によるコミュニケーション活動を通して学習を進める児童にとって、まとまった文章を扱う授業は負担になり英語嫌いを生み出してしまう可能性も否めない。筆者らは、そのような負担を軽減するためには、児童の意欲・態度の高揚を促すリテラシー活動の実践が急務であると考え、児童の主体的な参加を主軸とするプロジェクト型学習という枠組みの中で英語絵本の読み聞かせを実践し、その効果を検証した。

2．先行研究の概観

2．1．外国語学習における読み聞かせの効果

読み聞かせは、読書に音声の補助が加わった初期リテラシーの獲得を支援する活動であり、文字指導の経験が浅い児童でも大きな不安や抵抗感を感じることなく取り組める活動である（Dockrell, Stuart & King, 2010）。小学校外国語活動において、児童は、特定の（連語）表現（例：‘What would you like?’）を未分析のかたまりとして記憶することで生産的な言語能力を獲得していく。つまり、項目学習は英語習得の初期段階としての学習であり、システム学習への円滑な移行を図るにあたり、その過程で外国語学習が「習得的」に連結していることが不可欠である（田中・林，2014）。そのような第二言語習得を促すためには、英語のインプットは「量」だけでなく「質」が保証されなければならない。読み聞かせは以下の４つの条件を全て満たす、質の高いインプットを提供する初期リテラシー活動として位置づけられる（村野井，2006）。

① 理解可能性

「i＋１」（現在のレベルより少し上のレベル）のインプットが言語習得の促進には不可欠であるとする Krashen（1985）のインプット仮説に基づき、わからない言語項目が含まれていても文脈や視覚的情報などの手がかりによって全体の意味が捉えられるような、理解可能なインプットを豊富に取り入れることができる。

② 関連性

児童の生活、将来、興味・関心等に関連があるインプットである。

③ 真正性

提供されるインプットが語学学習を意図したものではなく、現実のコミュニケーションにおける言語使用を目的とした真正な（Authentic）インプットである。

④ 音と文字のインプット

音声インプットと文字インプットの両方をバランス良く取り入れることができる。

上記の４つのインプット条件に基づく読み聞かせの実践に松浦・伊東（2012）が挙げられる。松浦・伊東は、公立小学校５年生を対象に計11回の読み聞かせの授業を実践し、児童の①英語に対する理解力、②興味・関心、③聞く力（態度・意欲）に与える効果を検証した。絵本教材には、児童が日本語で内容に精通している The Very Hungry Caterpillar（邦題『はらぺこあおむし』）が選定された。①は、絵本の内容を問うテストにより測定され、②・③は、アンケートを用いて児童の自己評価により測定された。その結果、①については、回を重ねるごとに児童の理解力が増し、１－６回目と６－11回目の内容理解テストの平均点に有意差が見られた。②・③についても読み聞かせの有効性が示され、英語への自信や英語を読むことへの興味・関心の有意な向上も見られた。同実践での読み聞かせは ALT によって実践されたため、日本人教師の実践による効果を検証することは、今後の読み聞かせ活動の発展に貢献すると考えられる。絵本の読み聞かせを通して、児童は文脈の中でターゲット単語を認識・理解することができ、文章(絵本)を見ながら音声インプットを浴びることにより、音声と文字の対応関係についての気づきが促される。したがって、内容理解や情意・態度面の向上に加え、児童の英語の語彙知識もテスト形式で測定し、読み聞かせの効果をより多面的に検証する必要がある。

２．２．プロジェクト学習とは

本研究では、英語絵本の読み聞かせを「プロジェクト型学習」の枠組みの中で実施した。プロジェクト型学習とは、ある特定の目標に向かって課題解決を行い、他者との関わり合い・協調を重視しながら、児童の主体的・創造的な学びを促す学習形態を指す（東野・髙島，2011)。外国語活動においてプロジェクト型学習を実践することにより、児童は自ら課題や課題解決の方法などを自主的に選択・決定し、外国語を用いた表現活動や協同学習を通して、明確な目標を持ちながら課題解決に取り組むことができる。すなわち、相手意識や外国語を用いたコミュニケーションの必要性をより鮮明に自覚した、主体的な学びの実現が期待できる。

２．３．プロジェクト学習の実践例

本稿では２つの実践例に着目する。まず１つ目は、プロジェクト型カリキュラムの一環で英語劇を実践した的場・佐藤（2012）の実践である。的場・佐藤（2012）は、小学６年生を対象に英語劇を実践し、児童の英語に対する意識、並びに、英語を用いて表現することやコミュニケーションを図ることへの積極性に与える効果を検証した。５件法によるアンケートの結果から、「英語劇を楽しむことができた」「友だちと共に創り上げる喜びを感じた」「人前で表現することにより英語を話すことへの自信がついた」など、肯定的な回答が得られ、英語劇の有効性が示された。

森（2009）は、プロジェクト型外国語活動が成立するための要件として①既存の知識や児童の生活との関連、②自分自身で選択・決定できる場、③コミュニケーション活動の３つを掲げている。森は‘What colour’を学習する単元を開発し、３要件を満たす以下の活動を取り入れたプロジェクトを実施した。

① 世界の国々の衣装や肌，髪，目の色などを題材として扱い、図工と関連づけながら、文化や色の違いへの気づきを促す。
② 絵具を用いて、３原色からの色作りを行い、さまざまな色を混色し目的の色を作り出す。
③ 作った色を Show&Tell の手法を用いて相手に伝える。

単元後に実施したアンケートでは、「楽しかった」「他の教科の勉強を生かした」「外国の言葉や文化に

ついて分かった」などの肯定的な回答が得られた。

外国語活動においてプロジェクト型学習を実践することにより、児童の主体性やコミュニケーションへの積極的な態度の育成を図ることができる。さらに、合科性を重視する単元設定にすることで既存知識や身近な生活との関連付けが強まり知的好奇心を刺激する学びの実現が期待できる。しかし、先述したプロジェクト型学習の実践例（的場・佐藤，2012；森，2009）では、アンケート調査が単元後、または各回の授業後に実施されており、同一調査項目における単元前後の比較、すなわち、単元を通した情意面や態度の変化の把握が困難である。したがって、アンケートの各項目の数値の伸びがそれぞれの指導効果に限定されるものであるかは定かではない。そこで筆者らは、児童の英語習得を促す初期リテラシー活動である読み聞かせをプロジェクト型外国語活動の枠組みの中で実施し、その効果を検証した。

3．研究方法

3．1．研究課題と参加児童

佐賀大学教育学部附属小学校第６学年の児童115名（38名前後×３クラス）を対象に、外国語活動の時間を用いて、プロジェクト型授業を２回実践した。時間割の都合上、１クラスは１回のみ授業を行ったため、本稿では２クラス（合計77名）の結果のみを報告する。本研究の具体的な課題は以下の通りである。

①　プロジェクト型読み聞かせ活動により、児童の語彙知識は向上するか

②　プロジェクト型読み聞かせ活動により、児童の外国語活動への意欲・態度は高まるか

3．2．測定具

本研究では、松浦・伊東（2012）の実践に基づき、‘The Very Hungry Caterpillar’を絵本教材に設定した。児童の語彙知識と意欲・態度面における効果を検証するため、児童が「音」として精通している語彙で、絵本の頻出語彙である数字と曜日を扱う語彙テストと、外国語学習に対する意欲・態度を問う４件法による質問紙調査を実施した。通常の授業時間内でテストを実施したため、時間的制約から、ターゲット語彙数や質問紙の項目数は最小限に抑えた。語彙テストの内容は付録を参照いただきたい。

3．3．プロジェクト型読み聞かせ活動

森(2009)の実践に基づき、プロジェクト型外国語活動の３要件に該当する活動を以下のように設定し、プロジェクト型読み聞かせ活動を実践した。

①　既存の知識や生活との関連

児童が幼少の頃に読んだことがあり内容への精通度が高い「はらぺこあおむし」の英語版を教材に選定することで、既存知識（スキーマ）の活性化により英語での内容理解が促進される。また、同絵本では青虫が蝶々へと成長する過程が描かれているため、理科の授業内容との関連性も見いだせる。例えば、‘He built a small house, called a cocoon, around himself. He stayed inside for more than two weeks’という場面では、低頻出単語（cocoon）が使用されているが、提示される絵に加え、理科の授業で学習した蝶の成長過程についての知識の活性化により理解が促されると考えられる。

②　自身で選択・決定できる場

絵本や電子黒板を用いて慣れ親しみや内容理解の活動を行った後に、「オリジナルの‘The Very Hungry Caterpillar’の劇を発表しよう」という課題を設定した。時間の都合上、クラスの各班で曜

日を１つ担当することとした。担当曜日のはらぺこあおむしになりきって表現内容や表現の工夫について話し合う活動を設けることにより、児童が自主的にかつ協力して、課題解決の方法を選択・決定できる場を確保した。

③　コミュニケーション活動

劇の発表では、表現方法や声の大きさを工夫しながら外国語を用いて相手に自らの思いを伝え、聞き手は発話内容を理解し、それに対する反応（相槌をうつ、感想を述べるなど）を示すというコミュニケーション活動の場を確保することができる。その過程において、児童は相手に自らの思いを伝えることや相手の話を理解し発展させていく（感想を述べる）ことの大切さや難しさを実感し、次の外国語学習への意欲につながることが期待できる。

３．４．手続き

プロジェクト型読み聞かせ活動の単元を開発し、外国語活動の時間に合計２回の授業を実施した。１回目の授業の前に、語彙テストおよびアンケートを各学級で実施し、その後、第二筆者ともう１名の研究協力者の TT（Team Teaching）により、２回のプロジェクト型学習授業を実践した。２回目の授業終了時に再び語彙テストと質問紙調査を実施した。事前テストと同じ項目を用いたが、順序を変えて提示した。事後テストの日に欠席児童が２名いたため、75名にテストを実施した。２クラスに実施した授業内容については、単元計画（表１）と指導の流れ（表２・３）を以下に示す。

表１．単元計画（全２時間）

時	活動名・目標	主な活動
1	英語の絵本に親しみ、オリジナルの劇を考えよう。 ・絵本の読み聞かせを聞く。 ・曜日の表現に慣れ親しむ。 ・劇のデモンストレーションを見る。 ・劇の内容を考える。	・絵本の読み聞かせを聞き、何曜日に何をいくつ食べたのかといった話の内容を理解する。 ・曜日の歌を歌い曜日の文字と音に慣れ親しむ。 ・教師オリジナルの The Very Hungry Caterpillar 劇のデモンストレーションを見る。 ・各グループで劇の内容を考える。
2	劇を発表しよう。 ・英語の曜日と数字に慣れ親しむ。 ・劇の練習を行う。 ・劇の発表を行う。 ・劇の振り返りを行う。	・神経衰弱を通して英語の曜日と数字に慣れ親しむ。 ・前回考えた内容をもとに劇の練習を行う。 ・各グループごとに劇の発表を行う。他のグループは発表しているグループを見ておく。 ・劇に対する振り返りを行わせ、感想を発表させる。

表２．指導の流れ（１／２）

【本時の目標】
・絵本の読み聞かせを通して、話の内容を理解することができる。　（外国語への慣れ親しみ）
・絵本の中のキーワードに慣れ親しむ。　（言語や文化に関する気付き）
・劇の計画を立てる際に積極的に話し合いが出来る。（コミュニケーションへの関心・意欲・態度）

児童の活動	教師の働きかけ
１．挨拶をする。	・楽しい雰囲気で始められるよう英語で声をかける。Hello. How are you? Fine/hungry など。
２．英語版の「はらぺこあおむし」の読み聞かせを聞く。	・英本を見せながら読んだことがあるか、話の内容を知っているか尋ねる。 What's this?　Do you know the story? ・児童を教室前方に集め、読み聞かせを行う。 ・声の抑揚やジェスチャー、顔の表情などを活用しながら読む。
３．電子黒板で読み聞かせを聞く。	・児童に曜日と絵が描かれたワークシートを配り、線で結ぶように指示する。
４．答え合わせをする。	・月曜から土曜までの部分を再び読み聞かせながら答え合わせをする。
５．曜日に慣れ親しむために歌を歌う。	・文字を提示しながら曜日の歌 'Sunday, Monday, Tuesday...Sunday comes again.' を歌う。
６．プロジェクト課題「オリジナルの The Very Hungry Caterpillar の劇を発表しよう」を提示する。	・グループごとに曜日に分かれて、その曜日の劇を行うことを指導する。 ・児童の取組みが円滑に進むよう、教師がデモンストレーションとして劇の簡単な例を提示する。
７．グループごとに各曜日の劇の内容を考える。	・教師は活動が止まっているグループに助言をするために机間指導を行う。児童の活動をスムーズにするために各グループにセリフや動きなどの助言を行う。 ・出来上がったグループから練習するように指導する。
９．次回への指示を聞いて劇への方針を考える。	・次の時間で劇を行うことを提示し、連絡を行う。

表３．指導の流れ（２／２）

【本時の目標】
・絵本のキーワードに慣れ親しみながら、話の内容を理解することができる。
（外国語への慣れ親しみ）
・オリジナルの劇を、英語を用いて発表できる。　（コミュニケーションへの関心・意欲・態度）

児童の活動	教師の働きかけ
１．挨拶をする。	・楽しい雰囲気で始められるよう英語で声をかける。Hello. How are you? Fine/hungry など。
２．英語版の読み聞かせを聞く。	・絵本に出てくる数字と曜日を、カードを使って思い出させる。 ・電子黒板を用いて絵本の読み聞かせを行う。 ・読み聞かせを行いながら、児童とのやり取りを通して＜絵本の内容理解を促す＞
３．劇の台本を練習する。	・劇のデモンストレーションを見せ、Word　Bank をもとに、セリフの練習をさせる。 ・児童に劇のイメージを持たせる。
４．各グループでワークシート（付録②）を完成させ、劇の練習を行う。	・教師は机間指導を行い、グループに応じた助言を行う。
５．各グループごとに劇を発表する。	・発表後、何をいくつ食べたのかクラスで共有する。
６．グループの良い点を共有する。	・教師が、工夫しているグループの具体例を提示し、褒める。 ・声の大きさやジェスチャーなど、劇のポイントとなる部分を意識させる。 ・児童にどんなところが良かったかをしっかり考えさせるために、教師が児童に意識させる。
７．劇の振り返りを行う。語彙テストと質問紙に記入し教師に提出する。	・劇を行った感想などを発表させる。 ・振り返りシートに児童の感想や、良かった点・難しかった点などを記入させる。 ・アンケートの内容を説明し、記入させて提出させる。

４．結　　果

プロジェクト型読み聞かせ活動の効果と語彙テストの正答率の関係を検証するため、２×２分割表を用いてカイ二乗検定を実施した。クラス間でターゲット語彙の正答率に統計的有意差が見られなかった点と、２クラス共に同じ２名の教師による同様の授業を受けた点から、２クラス（合計77名）を合体させたサンプルを用いて統計解析を行った。数字の語彙については、正答率に有意な変化は見られなかった（$p > .05$）。紙面の都合上、指導効果が見られた語彙テスト結果のみ以下に報告する。

４．１．語彙テストの結果

表４に示すように、‘Sunday’, ‘Tuesday’, ‘Wednesday’, ‘Thursday’ の４つの語彙において、プロジェクト型読み聞かせ活動と語彙テストの正答率との間に有意な関係が示された。‘Sunday’, ‘Tuesday’,

‘Thursday’の３項目においては、実践後に児童の正答率に有意な伸びが見られた。その一方、‘Wednesday’に関しては、逆に、指導後に正答率が低下していることが示された。

表４．語彙テストの結果（曜日）

語彙		事前	事後	合計
		$\chi^2(1)=12.01$，$p=0.001$		
Sunday	誤	67	10	77
	正	28	47	75
	合計	95	57	152
		$\chi^2(1)=0.06$，$p=0.81$		
Monday	誤	7	70	77
	正	6	69	75
	合計	13	139	152
		$\chi^2(1)=12.87$，$p<0.001$		
Tuesday***	誤	30	47	77
	正	10	65	75
	合計	40	112	152
		$\chi^2(1)=15.95$，$p<0.001$		
Wednesday***	誤	12	65	77
	正	34	41	75
	合計	46	106	152
		$\chi^2(1)=14.66$，$p<.001$		
Thursday***	誤	36	41	77
	正	13	61	74
	合計	49	102	151
		$\chi^2(1)=1.21$，$p=0.27$		
Friday	誤	14	62	76
	正	9	66	75
	合計	23	128	151
		$\chi^2(1)=0.01$，$p=0.93$		
Saturday	誤	21	56	77
	正	20	55	75
	合計	41	111	152

※「誤」、「正」、「合計」の行／列の数字は人数を指す。
***$p<0.001$

表５．外国語学習に対する意欲・態度

質問項目	児童（n＝77[a]/75[b]）	
	事前[a]	事後[b]
１．英語で自分のことを伝えることに興味がある。	3.08（0.76）	3.09（0.89）
２．英語で伝えたいことを表現することは楽しい。	2.89（0.84）	3.06（0.94）
３．英語で外国の人と話したい。	3.22（0.92）	3.43（0.81）

※４：あてはまる，３：まあまああてはまる，２：あまりあてはまらない，１：あてはまらない

4．2．質問紙調査の結果

質問紙調査の結果から、外国語活動への意欲・態度は向上していることが示されたが、授業実践(単元)の前後で平均値に有意差は見られなかった（表５参照)。

5．考察とまとめ

5．1　研究課題①：語彙知識の向上における実践の効果

プロジェクト型読み聞かせ活動を通して、文字として正しく認識できる語彙の数が増えていたことが示された。本研究では、第二言語習得を促す４つのインプット条件（村野井，2006）に基づき、児童の精通度が高く（インプット条件②：関連性)、第二言語学習者用ではなく英語圏の児童を対象に作成された絵本（インプット条件③：真正性）とICT教材やワークシートを活用（インプット条件④：音声と文字のインプット）しながら活動を進めた。このようなアプローチにより、児童のスキーマを活性化させてインプットを理解可能なレベルに近づけることができ（インプット条件①：理解可能性)、絵本教材の意味理解が促進されたと考えられる。本研究において、児童は、読み聞かせを通して、聞こえてくる音声と絵本の文章の結びつきに気づくほか、劇の発表（プロジェクト）に向けて、語彙表現が文字で示されたワークシートを活用しながら英語での台詞を選定・決定する機会を得た。つまり、読み聞かせで取り入れたインプット（語彙理解）をアウトプット（語彙産出)・インタラクション（双方向のやり取り）につなげる発展的要素（プロジェクト）を実施したことにより、文字認識が深まり、ターゲット語彙の正答率向上につながったのではないかと考える。

一方で、‘Wednesday’に関しては、実践前に比べ、正答率が大幅に低下していた。したがって、先述したプロジェクト型読み聞かせ活動の効果はきわめて限定的であり、解釈には注意を要する。同単語に関しては、黙字‘d’が含まれており、音素―書記素の対応（GPC：Grapheme-Phoneme Correspondence）が不透明であることも、文字として単語を意識した際に正答率が下がった要因として考えられる。１単語のみに基づく示唆ではあるが、GPCが不透明で文字認識につながりにくい単語に対しては、フォニックス指導、なぞり書きなどボトムアップ指導による補強が有効であるかもしれない。

5．2　研究課題②：意欲・態度面の育成における実践の効果

外国語学習に対する意欲・態度面については、実践前後で統計的に有意な伸びは見られなかった。しかし、表５の平均値の素点を見ると、全体的に上昇はしているため、自身で課題（劇の発表）内容を選定・決定し、相手意識をもって自らの思いを伝えようとする主体性な姿勢や、課題解決を果たしたことによる喜びや達成感の獲得が関係しているのではないかと考える。本研究では、時間的制約から３項目のみでプロジェクト型外国語学習に関する意欲や態度面を測定したため、今後は、より多面的に情意面・態度の測定できる尺度を用いる必要がある。

本研究は２回という限られた授業時間数で実施したため、インプットの「量」が不十分であり、第二言語習得を促進するための「質」との相乗効果を十分に引き出すことができなかったと言える。また、ターゲット語彙数が曜日と数字の単語のみで数が限られていたほか、日本語の意味と結びつけるという受容的な知識しか測定できていない。したがって、今後、ターゲット語彙数を増やし産出的な（例：口頭で正しく表現できる)知識を含むより多面的な測定を行う必要がある。このように課題が残ったものの、プロジェクト型学習の枠組みを用いることで初期リテラシー活動である読み聞かせの文字認識における効果が高まることを示唆する結果が得られた点においては意義がある実践研究であると言える。

5．3　今後の研究課題と展望

本研究では、日本語（L１：first language）でのスキーマの活性化を促す絵本教材を活用し授業実践を行った。児童のＬ１スキーマを活用した先行研究と同様に（e.g., Dockrell, et al., 2010）、プロジェクト型読み聞かせ活動の効果は示されたものの、Ｌ１スキーマへの依存度の高さがどの程度寄与しているのかは明らかにされていない。成人学習者を対象とした先行研究では、Ｌ１スキーマの活性化と読解力の関係について、見解は必ずしも一致していない（e.g., Johnson, 1982；Hammadou, 1991）。本課題の克服に向け、筆者らは現在、Ｌ１スキーマへの依存度が低い絵本と高い絵本の両方を扱うプロジェクト型読み聞かせ活動の単元開発と授業実践研究を進めている。そのような取組を通して、読み聞かせ活動の効果をより精確に把握し、技能面（例：語彙学習）と情意面（例：学習意欲）の双方における効果についてより総合的な考察を得ることが期待される。

謝　辞

研究授業実践にあたり、多大なるご助言・ご指導を頂きました玄海町立玄海みらい学園の眞朽新先生に心より感謝申し上げます。また、共同授業実践者である多久市立中央小学校の田中佑香先生、実践内容についてご助言を頂いた佐賀女子短期大学の Jonathan Moxon 先生に深く感謝申し上げます。

付録

１．単語テスト（事前テスト）

②英語の意味を□の中から選（えら）んで、（　）の中にア～キで書いてください。

１．Wednesday　（　　）
２．Friday　（　　）
３．Saturday　（　　）
４．Monday　（　　）
５．Thursday　（　　）
６．Sunday　（　　）
７．Tuesday　（　　）

ア：月曜日	オ：金曜日
イ：火曜日	カ：土曜日
ウ：水曜日	キ：日曜日
エ：木曜日	

2．ワークシート

ワークシート

6年（　　）組　Name（　　）

○食べ物の Word Bank

1. curry and rice, persimmon, chocolate cake, pear, plum, strawberry, apple, orange, ice cream, pickle, cheese, salami, lollipop, cherry pie, watermelon, cupcake, sausage

○数字の Word Bank

1. one 2. two 3. three 4. four 5. five

○曜日の Word Bank

日:Sunday 月:Monday 火:Tuesday
水:Wednesday 木:Thursday 金:Friday
土:Saturday

2.下の台本の［　　］に書く内容を Word Bank から選び、書いてみよう！

How many?	What food?
(1)	(2)
(3)	(4)

3.劇の内容を完成させよう！

☆台本☆　　On　What day? ＿＿＿＿＿＿

We are very hungry.

We eat (1) (2) ,

and (3) (4)

We are

引用文献

Dockrell, J. E., Stuart, M., & King, D. (2010). Supporting early oral language skills for English language learners in inner city preschool provision. *British Journal of Educational Psychology, 80,* 497-515.

Hammadou, J. (1991). Interrelationships among prior knowledge, inference, and language proficiency in foreign language reading. *The Modern Language Journal, 75*(1), 27-38.

東野裕子・髙島英幸（2011）.『プロジェクト型外国語活動の展開―児童が主体となる課題解決型授業と評価―』高陵社書店出版.

Johnson, P. (1982). "Effects of Reading Comprehension on Building Background Knowledge." *TESOL Quarterly, 16,* 503-516.

Krashen, S. D. (1985). The input hypothesis: Issues and implications. London: Longman.

的場雄樹・佐藤臨太郎（2012）.「小学校外国語活動におけるプロジェクト型カリキュラムの実践と効果」『奈良教育大学教育実践開発研究センター研究紀要』第21号，3 - 4 .

松浦友里・伊東英.（2012）.「小学校外国語活動における英語絵本の導入効果に関する実践研究―第二言語習得研究におけるインプット理論の観点から―」『岐阜大学カリキュラム開発研究』第29号，94-101.

村野井仁（2006）.『第二言語習得研究から見た効果的な英語学習法・指導法』大修館書店.

文部科学省（2014）.『小・中・高を通じた目標及び内容の主なイメージ』URL：http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chousa/shotou/102/shiryo/__icsFiles/afieldfile/2014/10/07/1352268_01.pdf（アクセス日：平成28年５月30日）

森まゆみ（2009）.「高学年の児童の知的好奇心に応える外国語活動の在り方―児童の発達段階を考慮したプロジェクト型外国語活動の開発と工夫」『香川県観音寺市立観音寺南小学校指導案』URL：http://www.kec.kagawa-edu.jp/curriculum/houkoku/hiraku/h21/2009s04.pdf#search='%E5%A4%96%E5%9B%BD%E8%AA%9E%E6%B4%BB%E5%8B%95+%E3%83%97%E3%83%AD%E3%82%B8%E3%82%A7%E3%82%AF%E3%83%88%E5%9E%8（アクセス日：平成28年５月25日）

田中彰一・林裕子（2014）.「小中接続における英語習得研究－言語認識の必要性－」『佐賀大学教育実践研究』第31号，61-72.